



キング牧師没後50年

米国の公民権運動と統規制

ジャーナリスト

二木 寛郎

ロレイン・モーテル

米国テネシー州メンフィスの南側、

ダウンタウンとは程遠い寂れた通りに面して2階建ての建物がある。そ

の名を「ロレイン・モーテル」。その

看板は今でも残されているが、内部は「公民権運動博物館（National Civil Rights Museum）として公開されている。

1968年4月4日の夕刻、公

民権運動の父と言われるマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師（Martin Luther King, Jr.）が凶弾

に倒れた場所である。宿泊していた2階・306号室の前で、夕食に出かけようとする矢先に向かいの建物から狙撃されたという。そこには場

所を示す花輪が飾られ、内部には公民権運動の歴史を伝える様々な展示が行われている。キング牧師が宿

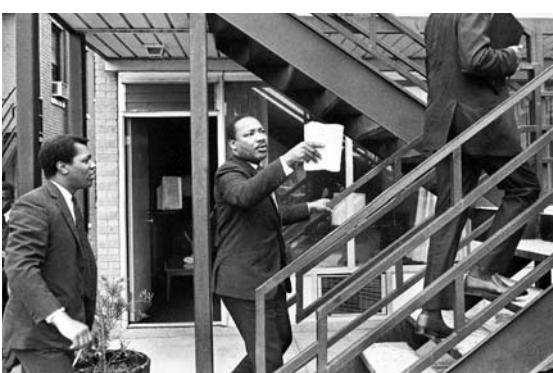
泊していた部屋は当時のままの姿が再現され、飲みかけのコーヒーカップまでが置かれている。

1964年にノーベル平和賞を授与されたキング牧師であつたが、1968年時点でも黒人であるキング牧師はダウンタウンの高級ホテルに宿泊することは叶わず、黒人経営の「ロレイン・モーテル」がメンフィスでの常宿だったという。

常に暴力を否定し、万民の平等を訴え続けたキング牧師は、凶弾に倒れる2日前のスピーチで、死を予見させるような内容を語っている。

「何かが起きるかも知れない。まだ困難が多くある。しかし、それは私には問題ではない。私は山の頂上に立っているからだ。誰もが望むように私も長生きをしたいと思う。しかしそれは今の私にはどうでも良いことだ。（中略）私は約束の地を見

た。そこにあなたたちと一緒に行くことは出来ないかも知れない。しかし、あなたたちには知つておいてほしい。私たちは約束の地に行くことができる。だから私は今幸せだ。何の心配もなく、誰も恐れない。私は神の栄光ある降臨を見たからだ」



死を予見させるような一節を含むこのスピーチは、1963年8月にワシントンDCで行つた「私には夢がある」で始まる、かの有名な演説と並んで人々の心に刻まれている。

公民権運動今昔

キング牧師が凶弾に倒れてから50年が経過したいま、キング牧師が夢見たように「ミシシッピ州は自由と正義のオアシス」になつただろうか。米国は「子どもたちが、肌の色ではなく、人格の中身によつて評価される国」になつただろうか。

公民権運動自体が、そもそも米国における黒人に対する人種差別を要因とするものであつたが、時代が下り世界が狭くなつた現代では、このキング牧師の思いは、単純に白人対黒人という構図に収まらなくなつてゐる。

たしかに米国を訪れると、場所によつては根強い黒人への差別や偏見が見受けられる場合もあるが、それは甚だ時代遅れの感がある。いまやメキシコとの国境に壁を築こうといふ大統領が君臨する状況である。「アフリカ系米国人」という言い方

があるが、市民権を取得して米国に暮らす海外からの移住者の出身地はもはやアフリカだけにはとどまらない。アジア、中東、南米、世界中の場所から米国に来る人々がいるのだ。

たしかに黒人に対する差別の背景にはかつての奴隸制度があることはわかる。しかし今時合法的に

奴隸が認められている国などありはしない。英国人ジョン・ニュートン（1725～1807）は、もと奴隸船の船員だった。その船内における黒人に対する家畜以下とも言える扱いを実際に見て、そのことを悔い改めるべくアメイジング・グレイスの歌詞を書いたと言わっている。

その昔ニユーオリンズには奴隸市

場が開かれ、奴隸たちはミシシッピ川に沿つてアメリカ各地に送られた。このキング牧師の思いは、単純に白人対黒人という構図に収まらなくなつてゐる。

たしかに米国を訪れると、場所によつては根強い黒人への差別や偏見が見受けられる場合もあるが、それは甚だ時代遅れの感がある。いまやメキシコとの国境に壁を築こうといふ大統領が君臨する状況である。「私にあなたの疲れと貧乏を委ねよ。」

高波に揉まれ戻る祖国なき人々、動乱に弄ばれる人々、岸に打ち寄せられながら自由に呼吸する事を望む人々を私のものに送り給え。

家なき人々のために

私は金色のドアに向けて灯火を掲げよう。エマ・ラザラス

と記されている。

米国は移民の国なのである。飢えや貧困から逃避して来る人もあれば、奴隸として拉致されてきた人もいる。そうした様々な人を包含して、移民の国なのである。新天地を求める祖国を後にしてきた人々、意思に反して強制的に連れてこられた人々を区別することも差別することもあつてはならない。



銃社会につきまとう暗殺の影

ブライアン・リンカーン大統領も暗殺された。

リンカーンは夜間に劇場で射殺されたが、ケネディ兄弟もキング牧師も凶弾に倒れたのは昼間である。銃社会米国では日常的に銃が生活のそばにある。暗殺とは名ばかりで、白昼堂々と銃が振り回される社会なのだ。

昨今でも銃社会アメリカでは銃を巡る様々な事件が後を絶たない。教育現場も然りだが、呆れたことに銃携行の教師にボーナス支給という大統領の発言まで出てくる始末である。キング牧師の公民権運動の遙か昔、奴隸解放を成し遂げたエイ

たしかに開拓民によつて國の礎が築かれた米国ではあるが、果たして米国の象徴とも言える精神であるフロンティア・スピリッツとともに銃が社会に蔓延するのはいささか時代遅れだろう。

ランプ大統領の動向を見ると、甚だ心もとない。

移民問題と公民権運動

米国内には至るところに「マーティン・ルーサー・キング通り(DR. Martin Luther King Jr Blvd)」がある。その数は1000近くと言わっている。キング牧師の遺志は公式には広く受け継がれ、米国社会に広く定着しているように見える。しかし、銃社会という観点から見ると、1968年の暗殺以来、どれほど進化が見られるのだろうか。ト

米国における黒人の地位について遅れだろう。

米国における失業率は米国全体で4・1%、黒人の失業率は6・8%、白人の失業率は3・7%、アジア系は2・5%、ヒスパニック系は4・9%だった。圧倒的に黒人の失業率が高い(米労働省調べ)。貧困率で見ても、2017年9月時点での全体の貧困率は前年に比べて0・8ポイント低下して12・7%と改善されているが、白人の割合は8・8%。黒人が22%、ヒスパニック系が19・4%、アジア系が10・1%(米国勢調査局)となつており、貧困率でも黒人の割合は高い。

ランプ大統領の標的となつている移民の方が、じつは失業率、貧困率ともに黒人のそれよりもましな状況なのである。キング牧師の切り開いた黒人の人権確保は、まだまだ志半ばと言えなくもない状況なである。

ロレイン・モーテル(=公民権運動)



動博物館)を取材した時、メンフィスの中心街にあるビール・ストリートを歩いた。そこは黒人のミュージシャンが活躍するライブハウスの林立する通りだつた。その時案内してくれた方のアドバイスは、通りの南端の繁華街が途切れるところから向こうにはいかない方が良いというものだつた。そこは貧困に苦しむ黒人たちの住居があるエリアなのだ。

一方、メンフィスの中心街から南に下つたところに「グレース・ランド」がある。キングことエルヴィス・プレスリーが建てた豪邸である。あたかも黒人のように歌う白人の青年だつたエルヴィスは、巨万の富を築き、白



亞の豪邸を所有したのだ。エルヴィ

暗殺の悲しいニュースはもうたくさんである。